

⑪. 基底部への埋没だけが「命令者」への道であり、暗黒を崇拜、好むことが戦闘への招待であるならば、死を賭けた遊びというぐらいに、軽い気持でニューヨークへ行くべきだ。この時、はじめて権力の国アメリカのニューヨークではなく、ただ便利なニューヨークとなるのだ。そして、そこまで埋没してしまったとき、全然角度と意味の違った神々のロマンが語られるのだ。

A、それはあくまでも太陽光線を浴びた、絶対に影のない笑いなのだ。人間的例えならば白痴的笑い。そして、それが全知全能なのだ。

B、ベトベトと、液が流れるようなロマンチストでなければならない。完全なナルシストなのだ。絶対に疑うということを知らない存在なのだ。すべてが、自分自身で完結されているものでなければならないのだ。

以上の条件がそろったとき、地鳴りがして、新しい命令者の誕生を祝うだろう。その時、命令者を失くした敷きの人々を、益々欺げかせ、死滅させることによって救うことが出来るかも知れない。

そのような地点にたつとき絵画が絵画を離れ絵画が絵画の世界を命令塔に変容させることが出来、人間どもを人間どもらしく生活させることが出来るのではなからうか。

⑫. まずはニューヨークへ行くことが最大の義務だ。それはあたかもエベレストへ登るに似ている。目的はなくても裸足で登ることは出来ないだろう。登る意志があれば、準備が必要となるだろう。そして、そこに登りついたとき、一個の登山者が出現する。でなければ遭難して死ぬだけの話だ。

⑬. 日時が決定しだい、少なくとも三ヵ月前には広告を出すだろう。その時、だれが来、だれが来ないか。来る来ないはつまらぬものだ。実際、エベレストに登る登らないはつまらぬことだ。だが登らねば登山家ではなからう。いま問題にしているのは登山の話なのである。だから問題を抜きにして、そこで神々の決定がくだされる場所であり、集会なのだ。だから集合場所は困難であればあるほどいいのだ。一人、あるいは誰一人行けないかも知れない。しかし懸命に行くだろう。この気持は、どう表現したらいいのだろうか。とにかく、こういう情熱、冷たさのみが、命令者不在の時代を戦って生きてゆく、一つの神経であることには間違いなからう。